

1 ケースから見た日本語教室における ボランティア活動について

On the volunteers' activities in Japanese language classes from one case

富川 拓
(Taku Tomikawa)

要 旨

小論は 2003 年 7 月から 9 月にかけて実施したボランティア日本語教室でのインタビュー調査を基に、実際にボランティア活動を行っている人々が抱くボランティア像を明らかにし、従来の研究におけるボランティアの定義との差異について検討するものである。インタビュー調査は現在継続中のため、今回はその中の 1 ケースを取り上げ考察を行った。

Key Words： ボランティア 日本語教室 公共性

はじめに

1995 年 1 月に発生した阪神・淡路大震災を契機に日本におけるボランティアに対する関心は高まり、被災者支援以外の分野においても活発に活動が行われるようになった。^{註1} また「特定非営利活動促進法」（通称 NPO 法）が 1998 年 12 月に施行されたことも活動を活発にした一因と認められよう。^{註2}

さまざまな分野に広がりを見せているボランティアの中で、今回調査対象として選定したものが日本語教室におけるボランティアである。ボランティア日本語教室はボランティア研究だけではなく、日本在住の外国人研究の分野でも注目を集めている領域である。これまで障害を持つ人々の介護を主な活動とする福祉ボランティアや、自然保護を主な活動とする環境ボランティアなどの研究は積み重ねられてきているが、対象を日本語ボランティア、地

註1 福祉、国際、環境などの分野を挙げることができる。

註2 非営利活動のうち 1. 保健、医療又は福祉の増進を図る活動 2. 社会教育の推進を図る活動 3. まちづくりの推進を図る活動などの 20 種類の活動を「特定非営利活動」という。今回の調査対象であるボランティア日本語教室「I」は NPO 法人の形態はとっておらず任意団体として活動を行っている。

域を滋賀県と絞り込むと先行する研究は筆者の知る限りない。調査を実施したA市に在住する外国人は、後述するようにその他の都市と比べて多いわけではない。しかしそのような状況に反して、A市では他の都市よりも多くのボランティア日本語教室が開かれている。この点に注目し、A市のボランティア日本語教室「I」を、今回の調査対象として選定した。

小論ではまず従来のボランティアの定義の問題点を検討し、ボランティア日本語教室「I」におけるインタビュー調査に基づき、ボランティア活動を行っている人々が抱くボランティア像と、ボランティア活動を行う動機についての考察を行う。

1. 滋賀県における日本語ボランティア教室

近年、滋賀県の人口増加は顕著であり、全国でも上位にランクされるようになった。新幹線、高速道路などが通りベッドタウン化されたことがその理由として考えられる。またそれと同時に外国人登録者数も増加傾向にあり、滋賀県国際課のホームページのデータによると平成14年12月末現在で25,108人となっている（図1）。愛知県などで外国籍（特にブラジル出身者）の人口が増加していることは全国的に知られているが、滋賀県においてもA市だけではなくB市、C市などでもその増加は顕著である。

外国人登録者数（平成14年12月末現在）

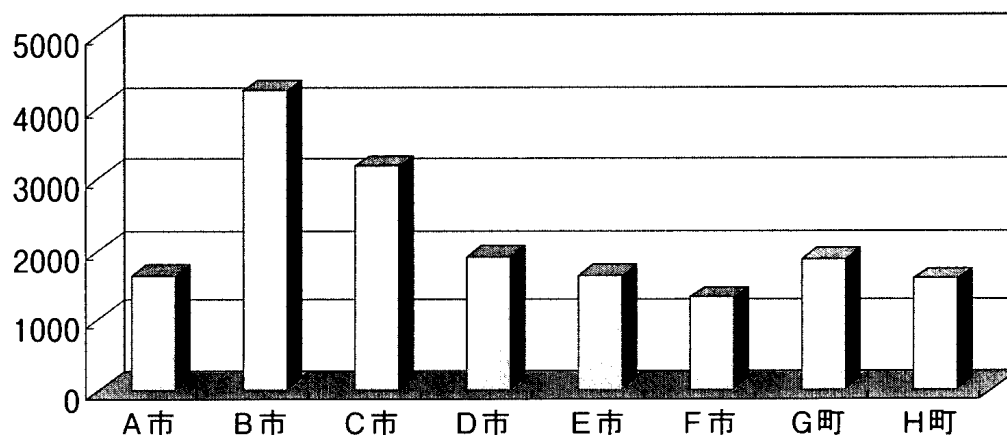


図1 外国人登録者数が1,000人以上の市町村

（滋賀県ホームページ<http://www.pref.shiga.jp/b/kokusai/siryou/chousonbetu.pdf>, 2003.11.17のデータを元に富川が作成）

このような現状に後押しをされ、外国人向けの日本語教室が各地で開かれるようになった。日本語教室に訪れる外国人には金銭的に苦勞をしている人が多いため、有料の日本語教室に通えないことは想像に難くない。ボランティアの教室が次々と設立されるのも自然な流れであろう。また指導者の立場からは、日本語教師として一定レベルの能力があることを示す「日本語教育能力検定試験」に合格した後も相当な現場での実務経験が必要なことから、比較的気軽に経験を積むことが可能であるボランティアの形態を選んでいるとも考察できる。

2. 調査における問題関心

調査における問題関心は以下の通りである。

- 1) ボランティア活動を行っている人々が抱くボランティア像
- 2) ボランティア活動を行う動機

1点目は、ボランティア活動とはこのようなものだ、という定義づけを個人が如何様に行っているのかということである。2点目は外国人に対する日本語教育のボランティア活動を行う際にどのような動機づけがなされているのかということである。また従来の研究から、ボランティア活動を行う動機として以下のものを事前に想定した。^{註3}

- (1) 自分探し、アイデンティティーの確立
- (2) 人間関係の形成、ネットワークキング
- (3) ボランティア活動の互酬性 (reciprocity)

そして日本語教育のボランティアに固有の動機として

- (4) 日本語教師養成機関の代替としてのボランティア教室の利用
- (5) 日本で生活する外国の人々の役に立ちたいという思い

の2点を事前に想定した。

(1)、(2)、(4)は換言すると、すべて他者や社会のために役立ちたいという動機ではなく、むしろ興梠の述べる内発的動機（自己実現型動機）にあたる（興梠 2003：70-71）。また(5)は「人や社会の役に立つ」というもので外発的動

註3 従来の動機については内海成治・入江幸男・水野義之編、1999『ボランティア学を学ぶ人のために』を参照

機（問題解決型動機）にあたる（興梠 2003：70-71）。(3)の互酬性とは外発的動機と内発的動機の両方を含むものである。人の役に立ちつつ、そこから何かを受け取るということをボランティア活動を行う際の動機とするものである。この場合、後ほど述べる無償性に抵触はしない。ここでの互酬性とは金銭的、物的なやり取りではなく、精神的な交流などを指すものである。^{註4}

3. ボランティアの定義に関する問題点

従来の研究におけるボランティアの定義について検討する。一般的にボランティア概念は次のような3つの理念で定義づけられることが多い。1) 自発性 2) 無償性 3) 公共性 である（入江 1999：4）。しかしこのような一般的な定義づけは実際にボランティア活動を行う人々を混乱させる原因ともなっている。その理由を公共性の理念を例に考察する。

ボランティアは「公共的」な活動でなければならないという考え方には、ある人の活動が「私的なもの」か「公共的なもの」の二つに分類できるという前提がある。「私的な領域」と「公共的な領域」との区別が当然のようになされているのである。この点を森（森 2003：29）は次のように指摘している。

「公共的な活動によって利益を得る人間を外延的に考えてみると、それは同じ社会に属する人間であり、一般的な人間であるとしか言えず、結局のところ別の人間の私的な利益に還元されざるを得ない。このように考えるならば『公共的』という概念は『私的でないこと』という消極的な仕方ではしか規定しえないということになる。結局のところ、『公的な領域』は『私的所有』の集合としてしか考えられていない。そのため、公共的な領域はきわめて希薄な意味しか持ちえないのである。」

森の指摘するように「公共的な活動」を行いながら「私的な活動」であるかのように、つまり他人のために労働を提供しながら、それを「趣味」などと同様に「自発的な活動」としておこなうボランティア活動は、そもそも「私的なもの」と「公共的なもの」との区別になじまないものであると筆者は考

註4 新社会学辞典によれば互酬性（reciprocity）とは、社会学的には自分と他人との間に生じる「返礼」の相互行為のことを指す。普通、他人に何かをもらったり逆にあげたりするとき、その返礼として何かをあげたりもらったりすることが、社会関係の最も基本的部分には認められる。この互酬性は個人間にも集団間にも存在する。ボランティア研究において互酬性は自分探しやネットワークングとともに活動に参加する重要な動機の一つとして捉えられている。

える。以上の例からもわかるとおり、ボランティア研究によってボランティアの概念が定義づけられるようになったが、学生などがそれを学ぶことにより逆にボランティアに対する確固としたイメージを抱くことが困難になる可能性が生じるのである。ではボランティアの現場では実際にどのような定義づけが個人によって行われているのだろうか。インタビュー調査によって明らかにしていく。

4. インタビュー調査の概要と考察

ボランティア日本語教室「I」では、指導者が18名、学習者が20名という体制で日本語学習支援活動が行われている。開催場所はA市にある公民館で、毎週日曜日の10時から12時まで実施されている。学習者の会費は500円/月、また指導者の会費も500円/月となっており、これらの会費は教材費、教室賃貸料などに当てられる。学習者の出身国はさまざまであるが、現在はインドネシア人が多く在籍している。

インタビューは2003年7月から9月にかけて、公民館における日本語教室終了後一人ずつ実施した。定年退職後の男性、主婦、大学生（女性）等合計6名に2時間から3時間インタビューを行った。ここではその中のJさんのケースを分析した。Jさんは定年退職後の男性である。なお現在インタビュー調査は継続中であり、質問項目を絞り込み同一人物に追加インタビューを行う予定である。よって今回はJさんのケースのみの暫定的な報告、分析とした。（インタビューの要約は資料1）

Jさんは非常に向学心が強く、ボランティアに関しても自身の定義をしっかりと持っている。全体としてJさんのボランティア像には自発性、無償性が当てはまると考えられる。反面、公共性についてはあまり触れられることはなかった。実際にボランティア活動に従事しているJさんのような人に、前述の研究における定義通りのボランティア像だけを当てはめては全てを説明することはできない。そこで当事者の考えるボランティアの定義をKJ法で分析した大東の先行研究を利用し分析を行った（大東 2003）。大東は国

際ボランティアに従事しているボランティア団体の構成員に1997年12月から1998年1月にかけて面接、電話、手紙、FAXなどの方法で調査を行った。この調査により実際に国際ボランティアの活動をおこなっている人々が抱くボランティア像が明らかにされている。外国人に対する活動という共通点もあり、十分参考にすることができる。(図2)

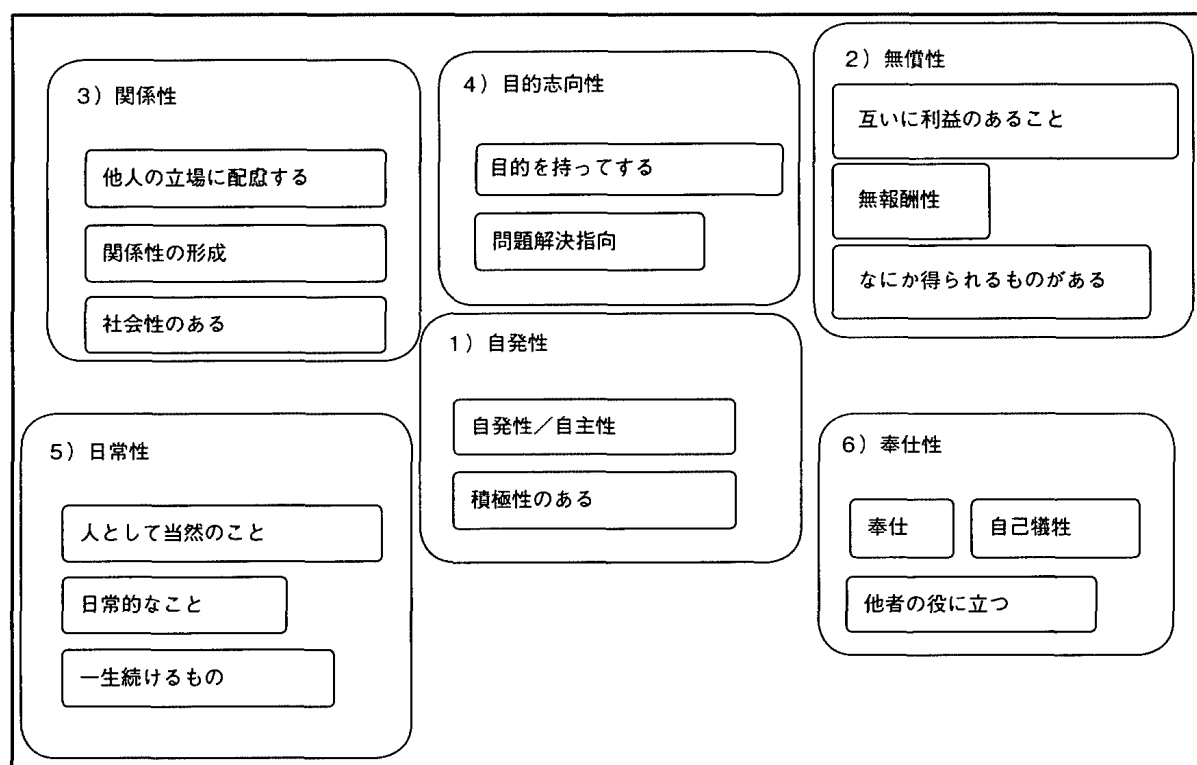


図2 ボランティアの定義（大東 2002：70-71 の定義を基に富川が作成）

この分析ではボランティアの定義を以下の大きなグループにまとめている。
1) 自発性 2) 無償性 3) 関係性 4) 目的志向性 5) 日常性 6) 奉仕性の6つである。この定義に当てはめて検討するとJさんが抱くボランティア像として、1) 自発性、2) の中の無報酬性、その中でも金品を求めないという点、3) の中の他人の立場に配慮する、助けるという点、4) の目的志向性、5) の中の人として当然のこと、無理のない範囲で、生活の一部として行うという点、6) の中の他者の役に立つという点を資料1から挙げることができる。このようなボランティア像の下、Jさん自身は①奉仕(自

己犠牲) というよりは自分自身の楽しみ、②成長のためにボランティアをしているのだという動機を述べている。また、③外国人、若い人との交流も楽しみの一つとして挙げており、その点では関係性の構築も動機の一つとなっている。なお日本語教師の資格取得は視野に入れていないことなどが明らかになった。

おわりに

Jさんはボランティアについて自身の定義を持って活動をしている。いい意味で割り切ったボランティア像を抱いているのである。前述の「公共性」というような難解で揺れ動く定義に捉われることなく活動をしている。また動機も明快で「自発性」を基礎として、「楽しいからやっている」「外国の方、若い方と交流できるから」といったものであった。

今後このような「自発性」によりボランティアが社会システムの維持のために利用される可能性がある。一般的に「自発性」とはみずから進んで何かを行うこととされている。その前提となるのが「主体」である。みずから進んで何かを行うことができる「主体」なくして「自発性」はあり得ない。しかし現代の「主体」は再帰的に自己を創りだすことによって「主体」として存在するものであり、社会的に作り出されるものである。主体とは不確定なものなのである(関 2001)。このように考えると不確定な主体を基盤とした「自発性」もまた不確定なものとなろう。自発性を根拠にすることにより現在の社会システムの維持にボランティアが利用される危険性も懸念される。日本語ボランティアで考えれば、行政などではフォローできない外国人の教育の肩代わりを潜在的にすることとなり、行政の不備が改善されることなく維持されることにもなるのである。

今回のインタビュー調査は日本語教育のボランティア活動を行っている人々のボランティア像と動機を把握することが目的であった。調査は継続中であるが、滋賀県内ではその他数多くのボランティア日本語教室があるため、団体間での差異が存在するか否かも明らかにする必要があるだろう。そのために

はインタビュー調査の終了後その分析結果を基に、尺度化された質問項目を作り定量的な調査を行いより客観的な分析を試みなければならない。

引用文献

1. 大東貢生, 2002, 「当事者の考えるボランティア」古川秀夫編著『現代日本のボランティア像』龍谷大学国際社会文化研究所
2. 入江幸男, 1999, 「ボランティアの思想」内海成治・入江幸男・水野義之編, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社
3. 森秀樹, 2003, 「カウンター・カルチャーとしてのボランティア」佐々木正道編著, 『大学生とボランティアに関する実証的研究』, ミネルヴァ書房
4. 森岡清美・塩原勉・本間康平, 1993, 『新社会学辞典』有斐閣
5. 関嘉寛, 2001, 「現代市民活動とボランティア」内海成治編著『ボランティア学のすすめ』
6. 興梠寛, 2003, 『希望への力 地球市民社会の「ボランティア学」』光生館

本論文は平成 15 年度佛教大学特別研究助成（代表：大東貢生）による研究成果である。

（資料1 Jさんに対するインタビューの要約）

ボランティア日本語教室「I」のJさん

調査日時：2003 年 8 月 31 日 14：00～15：50

質 問 者：2 月から日本語のボランティアを始められたということなんですね。あの、広報を見てこられたということなんですけれども、どういった理由で始めようと思われたんですか。

J さ ん：あのね、きっかけはこちらの***（観光地）のボランティアガイドやとった。（略）A 市と中国の***省が友好都市で、文化交流やってますわね。それに応募したんですよ。（略）そこで初めて外国へ行って、いろんな所見て、異文化というか外国に、

一応垣間見たというか（略）外国に、異文化に興味があって、それで、接する機会がないかなと。（略）実際やってみて、日本語教えるというか日本語は自分自身も勉強にもなるし、ある面は目標達成なんですけどね。

J さ ん：土日だけに登録したの。ボランティアだから土日でもなんか予定があれば、だめです。（略）やっぱり、性格もあんやろな。じっとしてるのが、やっぱり、やっぱり、リズムがあっていいやじゃ、今日はボランティア、明日は日本語、雨の日は本でも。（略）土日は月曜日から金曜日まで働いているから、毎日日曜日というのも大変よ、て言われるし、図書館行っても毎日いけたもんやないよって、まあそうやろなとおもって、なんやかんやとやってる方がね、リズムがいいんやけど、体の方もね。（略）自分のペースで出来るし。なんかあれば、断りはしないけれども、気が楽やね。

質 問 者：なんか悪かった事というのはなかったですか。なんかこういうの困ってますと言うのは。

J さ ん：そんなないなあ。あればそんな参加しなければいい。（略）ほんで自分はもしくはNOにしようおもたらNOで通るんやから。そういう事、そんでマイナス面は発生しないと思います。

質 問 者：最近有償ボランティアと言うか、謝礼を出すという所も増えてはいるんですけども。

J さ ん：（ボランティアガイドに関して）車賃、車賃言うか交通賃として1,500円もらえる。それはくれるの。交通賃よ。交通賃いらん人は。ほれ、なんするかはしらんけど、そんなのが目的じゃないし。

質 問 者：ボランティアというのは人に役立つものであるという考え方が、まあ、結構根強くあるんですけど（略）どういう風に思われますか。

J さ ん：そこまで深く考えてないなあ。（略）

質 問 者：困ってる人を助けると、助けた人から感謝されるということもあると思うんですが、ボランティアをやっていてその感謝される、

ありがたいと言われると言うことは重要なことだと思われませんか。

J さ ん：そんな要求してることも、期待してることもないなあ。(略) ど
っちかというと自分、自分の研鑽が半分以上かなあと思ってる。

質 問 者：会社で働いていたのとは違うんですか。

J さ ん：ああ違うなあ。まあ、会社は会社でやっぱ組織だし(略) 学習、
教える方ね、あの、***大の、ほれ学生もいんのよ。***大の。
二人か三人ぐらい。そんな人達としゃべれないもんね、同じテー
マで。あの、まあ、こうやって報告会したりよ。ね、男性もいる
わ女性もいるわ、ね、自分の息子とか娘とか若い人と接すること
はあってもよ、なんか、そういうても、そうやな、僕ら年齢な
るとそうなるやん。こういう人やからそうやない、「I」の中指導
者大学生もおるやん。現に。来年の三月で卒業終わりという人も
いるよ。ほら、感覚わかるやん、話してて。それだけでもプラスよ。

以上